

『きつと、だいじょうぶ』

千葉県 富津市立富津小学校 三年 森田 悠生

今年の夏、ぼくは一人で岩手県の八幡平市というところに行った。

東京駅から東北新幹線で盛岡まで行く。そして花輪線に乗りかえて目的の場所までぼくは一人で旅をした。

「不安だったら、あきらめてもいいんだよ」

お母さんは出発の日までそう言っていた。

ぼくはとても不安だったけれども、どうしても、どうしても、おばあちゃんに会いたかった。不安よりもその気持ちのほうが強かった。

そして、とうとう発車の時刻になって、ぼくは心配そうに見送るお母さんに手を振った。

「ぼくはどこに行くの？」

となりのシートに座ったおじさんがそうたずねてきた。

「岩手県の八幡平です」

「ずいぶん遠くまで行くんだね。おじさんも八幡平には若いころ、行ったことがあるよ」

おじさんはそう言うとおぼくを見てにっこり笑った。けれどもぼくは黙っていた。色の濃いサングラスが少し怖かったからだ。

新幹線に乗るのは初めてではない。でも、東北新幹線に乗るのは初めてだった。八幡平で民宿を経営しているおばあちゃんのところにはいつも自動車で行っていた。

時々、東北自動車道から新幹線が走っているところを見たことがあるけれど、その新幹線に今はぼくが乗っている。なんとなく不思議な感じがした。

外の風景が山と田んぼばかりになったところ、車内販売がやってきて、となりのおじさんはビールとおせんべいとチョコレートとオレンジジュースを買った。

「ぼくからのプレゼント。はい、どうぞ」

おじさんがチョコレートとオレンジジュースをぼくに買ってくれたということよりも、おじさんが自分のことを「ぼく」と言ったことにぼくは少しおどろいた。

ぼくはお礼を言った。今思うときつと小さな声でおじさんには聞こえていなかったと思う。

おじさんはビールを飲みながら新聞を読み始めていた。お父さんやお母さんが読むふつうの新聞ではなくて、ちよつと変な新聞だ。

ぼくはとなりのおじさんがいい人なのか、そうではないのか、よくわからない感じがした。

「ぼくは盛岡でおりるんだろ」

突然、その声をかけられてぼくはびっくりした。

「岩手の人はね、岩手山が見えると『きつと、だいじょうぶ』って気持ちになるんだよ」

おじさんは窓の外をゆびさして

「今日にくつきりとよく見える」と言った。

大きな山が窓の外にはつきり見えた。そういえば、お母さんも同じようなことを言っていたことをぼくは思いだした。

おじさんとぼくは盛岡駅で新幹線をおりた。おじさんは宮古に行くと言った。津波で家を流されてしまったけど家族は無事だったと教えてくれた。そしてさいごに「きつと、だいじょうぶ。ちゃんと目的地に着けるよ」とぼくの頭をやさしくなでくれた。

『きつと、だいじょうぶ』その言葉はぼくの心の中に強くひびいた。